

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 9	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Relation between heavy and binge drinking and all-cause and cardiovascular mortality in Novosibirsk, Russia: a prospective cohort study. ロシア、ノボシビルスクでの大量飲酒、過剰機会飲酒と総死亡、循環器疾患志望の関連：前向きコホート研究	
執筆者	
Malyutina S, Bobak M, Kuriovitch S, Gafarov V, Simonova G, Nikitin Y, Marmot M.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Lancet 2002; 360: 1448-54	
キーワード	
大量飲酒、過剰機会飲酒、死亡率、ロシア、コホート研究	
<p>背景</p> <p>中等量のアルコール摂取は循環器疾患死亡率を減少させるが、大量飲酒 (heavy drinking) や過剰機会飲酒 (binge drinking) は有害だと考えられている。しかしこの 2 種類の飲酒パターンのうちどちらが循環器疾患死亡により影響を与えているか明らかではない。本研究は、過剰機会飲酒の割合が高いロシア人集団を対象として、飲酒パターンと死亡の関連を検討した。</p> <p>対象と方法</p> <p>西シベリアにあるロシア第 3 の都市ノボシビルスクで、循環器疾患に関する国際比較研究 WHO-MONICA に参加した 2 つの地区で、MONICA の対象者として 1984~1986 年、1988~1989 年、1994~1995 年に無作為抽出された 25~64 歳の男性 6,502 人を対象とした。飲酒量は 3 通りの方法で把握された。それは頻度 (非飲酒、月 1 回未満、月 1~2 回、週 1~2 回、週 3 回以上)、面接前 1 週間のアルコール摂取量、1 回の飲酒機会に飲む典型的なアルコール量である。飲酒量に関する区分は純アルコール換算で 80g、120g、160g という 3 つのカットオフ値を設定し、1 回の飲酒機会に 160g 以上を飲む場合を“過剰機会飲酒”と定義した。2000 年に 1994~1995 年の調査対象者のうち 437 人に飲酒習慣の再調査が実施され、再現性が高いことが確認された。死亡の追跡は 1998 年末まで行われ、平均追跡期間は 9.5 年であった。相対危険度は、年齢、教育、血圧、喫煙、BMI、総コレステロールを調整して求めた。</p> <p>結果</p> <p>観察期間中に 836 人が死亡し、395 人が循環器疾患死亡であった。ベースラインでの“過剰機会飲酒”の割合は 16% (1,005 人) であった。面接前 1 週間の飲酒量と循環器疾患死亡の関連は U 字型を示したが有意差はなく、外因死とは一定の傾向を認めなかった。また 1 回の飲酒機会に飲むアルコール量 (頻度は少なくとも月 1 回以上の者で解析) でみると、“過剰機会飲酒”の 80g 未満と比べた相対危険度は、総死亡では 1.05 (95%CI 信頼区間 0.80-1.36)、循環器疾患では 0.99 (95%CI 0.66-1.50)、虚血性心疾患では 1.27 (95%CI 0.81-1.99)、事故などの外因死で 2.08 (95%CI 1.08-3.99) であった。頻度については、月 1~2 回を基準とすると、週 3 回以上の総死亡の相対危険度が 1.33 (95%CI 1.00-1.78) であったが、他に有意な関連は認めなかった。本研究の非飲酒者は禁酒者を含み、総死亡は月 1~2 回が最も低いためここを基準群としている。最後に頻度と 1 回の飲酒機会に飲むアルコール量でクロス表を作り、それぞれの相対危険度を求めると、週 3 回以上かつ 1 回 120g 以上の群で有意に総死亡、循環器疾患死亡の相対危険度が高かった。相対危険度と 95%CI は、それぞれ、1.61 (1.04-2.50)、2.05 (1.09-3.86) であった。</p> <p>結論</p> <p>総量を考慮しない“過剰機会飲酒”が関与するのは外因死のみであり、循環器疾患死亡と関連するのは、1 回量が多くかつ頻度も高い大量飲酒者 (全体の 5%) であった。</p>	